

## 2. 診断

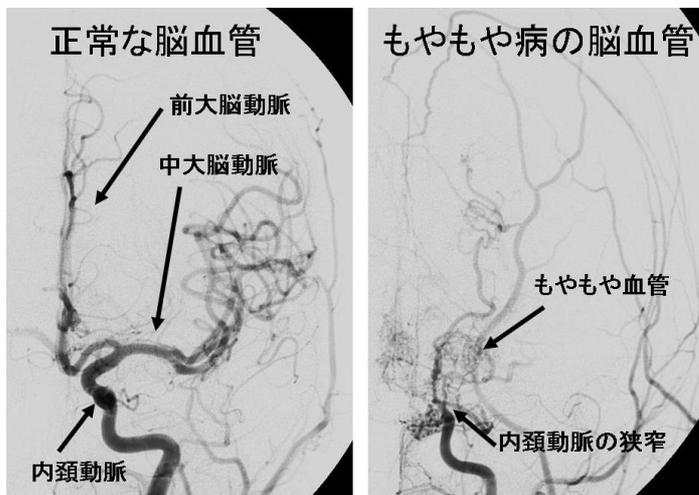
診断は、臨床症状と画像診断で行われますが、もやもや病以外にも類似の症状、画像所見を示す疾患があり明確な診断基準があります。症状は前述のとおりでもやもや病を疑い、さらに画像診断で診断を確定します。

### 画像診断

主にカテーテルによる脳血管撮影と核磁気共鳴画像法(Magnetic Resonance Imaging: MRI と呼ばれます)によって行われます。

脳血管撮影は、直径 1.3mm ぐらいの細い管(カテーテル)を足の付け根の動脈から入れて行います。このカテーテルを頸部の動脈まで持っていき造影剤を注入して血管を撮影します。

そのため検査には僅かですが、危険性を伴い、適応は慎重であるべきです。成人では、刺入部の局所麻酔だけで可能な検査ですが、小学生以下では通常全身麻酔で行います。



脳血管撮影(左頸動脈撮影)

左が正常な脳血管で右がもやもや病の患者さんの脳血管です。

MRI による診断には、脳血管撮影のような危険性はありません。

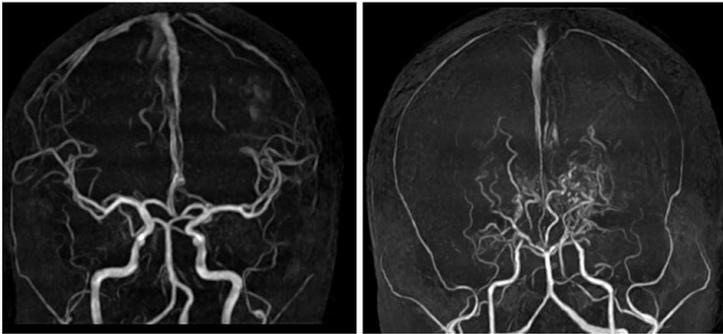
MRI では MRA という撮影を同時に行えば脳自体のみならず脳血管も大まかですが見ることができるため、まず最初に行う検査法となります。

しかしカテーテルによる脳血管撮影に比較してその診断能力はやや劣ります。

MRI では入院の必要はなく、検査時間も 30 分ぐらいです。ただし動くと検査できないため小さな子供の場合は、眠り薬(鎮静)が必要です。

正常な脳血管

もやもや病の脳血管



MRI による血管撮影

左が正常な脳血管で右がもやもや病の患者さんの脳血管です。

CT(X 線を使った断層撮影)は、検査が短時間で済むため緊急時に脳出血と脳虚血の鑑別に有用です。

ただし CT では、出血や明らかな脳梗塞の有無は評価できますが、もやもや病の診断は困難です。

しかし造影剤を用いることで CT を使った 3 次元撮像法は脳血管撮影が可能で、診断に有用な場合もあります。